



TOEIC® テストの新形式問題における パート2の難易度を推察する ——ETS 作成問題の分析を通して——

井 上 治

概要 本論では、前回のリニューアル以降に出版された ETS 作成による公式問題集を、「リ
ニューアル後の初期」のもの、「リニューアル後の後期」のもの、そして、「今回のリニュー
アル」のものという3つの段階に分け、総計290問の Part 2 の問題について、「質問文の語
数」、「質問文の種類」、そして、「質問文に対する誤答の選択肢」という3種類の観点から分
析を行なう。そして、10年ぶりの改定となった TOEIC® リスニング&リーディング テスト
において、「今回のリニューアル」の Part 2 の問題がリニューアル以前のものとちがいがあ
るのかどうかをみることを通して、新形式問題における Part 2 の難易度を推察する。

キーワード TOEIC® リスニング&リーディング テスト, リスニング・セクション パート
2, 公式問題集, 難易度

原稿受理日 2016年9月27日

Abstract The purpose of this paper is to speculate whether the level of difficulty
of the questions in Listening Section Part II of the TOEIC® Listening & Reading
Test has increased or decreased. The reason for considering this is because the form
of the exam questions has been partially revised for the first time in ten years.
The 290 questions of Part II by ETS analyzed here are divided into three groups: the
questions made “in the early years after the last revision,” “in the late years after
the revision,” and “in the current revision.” The questions are also analyzed and
compared from the three points of view: “the number of words in the question sentences,”
“the types of question sentences,” and “the distracters to the question sentences.”
On the basis of these analyses, the level of difficulty of the Part II questions in the
new test is speculated on.

Key words TOEIC® Listening & Reading Test, Listening Section Part II, Official
practice book, Level of difficulty

1. は じ め に

2016年1月に、TOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC®) を運営する国際ビジネスコミュニケーション協会は、2016年5月29日実施の公開テスト (団体特別受験制度 [IP: Institutional Program] においては2017年4月 [予定]) から、TOEIC® について新しい出題形式を導入することと各パートの問題数を変更することを発表した。1979年12月に第1回公開テストが始まって以降初めての問題形式の変更が行われたのが2006年5月実施の公開テストからであったので、今回は実に10年ぶりのリニューアルということになる。

今回のリニューアルについては、国際ビジネスコミュニケーション協会のホームページにおいてはもちろんのこと、上の発表の翌月に発行された ETS (Educational Testing Service) 作成による公式問題集である『TOEIC® テスト 公式問題集 新形式問題対応編』 (以下、『新形式』) においても詳しい説明がなされている (pp.7-9, pp.11-33)。

本論文で考察する、リスニング・セクションの Part 2 「応答問題」に関しては、その変更点は、「問題数が30問から25問に減ります」、「Part 2 の例題はなくなります」となっている (『新形式』14)。Part 3 「会話問題」に関して、「問題数が30問から39問に増えます」 (『新形式』16) という問題数の変更だけでなく、「3人の話し手による会話を聞いて答える問題が出題されます」、「会話中の表現の意図を問う設問が出題されます」、「図表を見て答える問題が出題されます」 (『新形式』16) といった出題形式の追加も行なわれていることとくらべると、Part 2 に関しては、問題数が5問減っただけで何も変わっていない、ということがいえる。

Part 3 に関しては、上のような出題形式が追加されたことで、パート全体の難易度が上がることが比較的容易に推測できる。そのいっぽうで、出題形式が変わらない Part 2 の難易度は新形式問題のテストにおいてどのようになるであろうか、というのが本論文のテーマである。

振り返ってみると、Part 3 に関しては、2006年のリニューアルの際にも、問題数は30問のままであったが、出題形式には大きな変更が行なわれた。ひとつの会話につき設問が1問であったのが、ひとつの会話につき設問が3問となっただけでなく、その会話が「Aさん—Bさん—Aさん」という構成に必ずなっていて、しかも、ひとりの台詞が1文で終わることも多い短めの会話であったのが、「Aさん—Bさん—Aさん」もあれば「Aさん—

Bさん—Aさん—Bさん」もあり、しかも、ひとりの台詞がひとつの文で終わることがま
ずない長めの会話になった。というわけで、前回のリニューアルの際も、Part 3 に関して
はパート全体の難易度が上がることが推測できた。それに対して、Part 2 に関しては、問
題数も出題形式も変更がなかったので、難易度は変わらないであろうことが推測できた。

そして今回のリニューアルとなったわけであるが、出題形式が今回も変わっていない
Part 2 に関して、前回のリニューアルで Part 1「写真描写問題」の問題数が20問から10
問に減ったことで Part 1 の難易度がやや上がったように、「問題数が5問減った」ことで
難易度が上がるのであろうか。あるいは、「スコアの持つ意味や難易度に変更はありません」(『新形式』9)と国際ビジネスコミュニケーション協会は述べ、そのいっぽうで Part
3 の難易度が上がることが推測できることから、Part 2 の難易度は下がるのであろうか。

本論文では、前回のリニューアル以降に出版された ETS 作成による公式問題集を、「リ
ニューアル後の初期」のもの(2005年発行の『TOEIC® テスト 新公式問題集』[以下、
『Vol. 1』]と2007年発行の『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 2』[以下、『Vol. 2』]),
「リニューアル後の後期」のもの(2012年発行の『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 5』
[以下、『Vol. 5』]と2014年発行の『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 6』[以下、『Vol.
6』]), そして、「今回のリニューアル」のもの(『新形式』)という3つの段階に分け、総
計290問の Part 2 の問題について、「質問文の語数」、「質問文の種類」、「質問文に対する
誤答の選択肢」という3種類の観点から分析を行なう。そして、「今回のリニューアル」
の Part 2 の問題がリニューアル以前のものとちがいがいいのかどうかをみることを通し
て、新形式問題における Part 2 の難易度を推察してみたい。

2. 「質問文の語数」から検討する

まずは、「質問文の語数」という観点から、Part 2 の新形式問題における難易度を予測
してみたい。もちろん、質問文の語数が多い場合でも、ひとつひとつの単語が短ければ音
声的には短い質問文になるわけであるし、よく知っている単語ばかりで構成されていれば
質問文の長さをより感じなくなるわけではあるが、基本的には語数が多いと音声的にも長
い質問文となり、質問文が長ければ長いほど質問文の内容を把握しにくくなるので問題の
難易度は上がる。また、正答の選択肢が選びやすくなっていれば、質問文の語数が多い場
合でも問題の難易度は下がるわけであるが、基本的には質問文の内容を把握できれば正答
にたどりつける確率は格段に高くなるわけなので、やはり、基本的には質問文の語数が多

い場合には問題の難易度は上がることになる。

表1 質問文の語数の平均値

	Vol. 1	Vol. 2	Vol. 5	Vol. 6	新形式
TEST 1	9.2	8.23	7.67	8.67	8.4
TEST 2	8.73	8.17	7.63	8.67	8.56
TEST 1 + 2	8.97	8.2	7.65	8.67	8.48

上の表1は、各公式問題集に収載されている2回分の「練習テスト」それぞれについて、Part 2の質問文（各30問、『新形式』は各25問）の語数の平均値（小数点以下第三位を四捨五入）を算出したものである。そして、『Vol. 1』と『Vol. 2』の平均値は $1,030\text{語} \div 120\text{問} = 8.58\text{語}$ 、『Vol. 5』と『Vol. 6』の平均値は $979\text{語} \div 120\text{問} = 8.16\text{語}$ であり、「リニューアル後の初期」のもの、「リニューアル後の後期」のもの、「今回のリニューアル」のものという3段階での推移をみると、 $8.58\text{語} \rightarrow 8.16\text{語} \rightarrow 8.48\text{語}$ となっている。

『Vol. 5』と『Vol. 6』のあいだにおいては1語以上の増加がみられるが、実は、『Vol. 3』では8.33語であったのが、『Vol. 4』では7.93語に減少し、さらに、『Vol. 5』で7.65語まで下がっているのである。しかし、『Vol. 6』では7語台をキープせずに8語台後半まで戻り、『新形式』でも8語台の真ん中をキープしているところをみると、今後は7語台に下がることなく、今回分析した290問の平均値である $2,433\text{語} \div 290\text{問} = 8.39\text{語}$ の前後を推移していくのではないかと考えられる。このように、質問文の語数の平均値だけをみると、新形式問題におけるPart 2の難易度は変わらないであろうことが考えられる。

しかし、もう少し細かくみると、新形式問題ではPart 2の難易度に変化がみられる可能性が推察される。

表2 質問文の語数の分布

	6語以上	7語以上	8語以上	9語以上	10語以上	12語以上	14語以上
Vol. 1+Vol. 2	92.5	81.7	65	41.7	25.8	14.2	4.2
Vol. 5+Vol. 6	92.5	78.3	60	37.5	27.5	3.3	1.7
新形式	100	86	76	48	24	4	0

上の表2は、表1で分析したものと同一Part 2の質問文に関して、ある語数以上の質問文の数が質問文総数に占めるパーセンテージ（小数点以下第四位を四捨五入）を算出したものである。まず注目すべき点は、『新形式』において、“When does the meeting start?”

（『Vol. 1』TEST 2-13番），“Where have you been?”（『Vol. 2』TEST 2-11番），“Whose coffee cup is that?”（『Vol. 5』TEST 1-14番），“Is the train on time?”（『Vol. 5』TEST 2-12番）といった6語未満の質問文がなくなっていることである。この傾向は直近の『Vol. 6』からみられ、『Vol. 5』では60問中8問あった6語未満の質問文が、『Vol. 6』では“Why are the technicians here?”（TEST 1-25番）という1問だけになっている。したがって、新形式問題においては、今後すべての質問文が6語以上になることが予測される。

次に注目すべき点は、『新形式』において、「6語以上」から「9語以上」までのパーセンテージがそれまでのものとくらべて高くなっていることである。また、直近の『Vol. 6』においても、「6語以上」は98.3%、「7語以上」は83.3%、「9語以上」は48.3%とほぼ変わらない数値であるのに対して、「8語以上」は63.3%となっていることから、新形式問題においては、「6語以上」から「9語以上」までの、特に「8語以上」の質問文の増加が予測される。

最後に、「10語以上」から「14語以上」までの質問文をみると、“Don’t you want to get some coffee before we go back to the office?”（『Vol. 1』TEST 1-33番），“Do you want to stop now, or should we try to finish the work?”（『Vol. 2』TEST 2-24番）のような「14語以上」の質問文に関しては、すでに「リニューアル後の後期」のものにおいて1問しか出題されておらず（“Is the conference center on the north side of the highway or on the south side?” [『Vol. 6』TEST 2-28番]），『新形式』においては1問も出題されていない。また、「12語以上」の質問文に関しても、すでに「リニューアル後の後期」のものにおいて出題のパーセンテージがかなり低くなっており、その設定は『新形式』においても維持されている。そして、「10語以上」の質問文に関しては、上の表ではほぼ横ばいの数値であり、さらに、直近の『Vol. 6』における36.7%という高い数値から反動して『新形式』では24%まで大きく下がっていることを考えると、ここから数値が大きく上がることは予測しづらい。

以上のことをまとめると、新形式問題においては、6語未満の短い質問文や12語以上の長い質問文はほぼなくなり、今回分析した290問の平均値である2,433語÷290問＝8.39語の前後に相当する6語から9語程度の質問文が7割を超え、長くても10語程度で収まるであろうことが推測できる。10語以上の質問文の割合が減少するこの傾向は、TOEIC® 上級者にとってはPart 2が易化することを示している。しかしそのいっぽうで、筆者がこれまでの論文のなかで400点・500点といった彼らの目標をクリアすべくPart 2の攻略法を提

示してきた TOEIC® 初級者にとっては、6 語未満の短い質問文が減少し、6 語・7 語の質問文ではなく 8 語の質問文が増加するであろう新形式問題の Part 2 は、やや難易度が上がるといえるであろう。

3. 「質問文の種類」から検討する

次に、「質問文の種類」という観点から、Part 2 の新形式問題における難易度を予測してみたい。質問文の種類は、TOEIC® を運営する国際ビジネスコミュニケーション協会が公式問題集以外に発行している TOEIC® 対策本である『TOEIC® テスト 公式プラクティスリスニング編』の Part 2 の章立て（「Unit 5 WH 疑問文」, 「Unit 6 Yes/No 疑問文, 選択疑問文」, 「Unit 7 依頼・許可・提案・勧誘の文」[以下, 依頼・提案の文], 「Unit 8 付加疑問文と否定疑問文」[以下, 付加・否定疑問文], 肯定文と否定文）に合わせて 6 種類に分類する。

表 3 質問文の種類の分布

	Vol. 1	Vol. 2	1 + 2	Vol. 5	Vol. 6	5 + 6	新形式
WH 疑問文	45	41.7	43.3	45	41.7	43.3	42
Yes/No 疑問文	13.3	15	14.2	8.3	10	9.2	14
選択疑問文	8.3	6.7	7.5	6.7	6.7	6.6	6
依頼・提案の文	11.7	8.3	10	8.3	13.3	10.8	14
付加・否定疑問文	10	15	12.5	15	15	15	16
肯定文と否定文	11.7	13.3	12.5	16.7	13.3	15	8

上の表 3 は、表 1 と表 2 で分析したものと同一 Part 2 の質問文に関して、6 種類それぞれの質問文の数が質問文総数に占めるパーセンテージ（小数点以下第四位を四捨五入）を算出したものである。まず、「WH 疑問文」に関しては、数値に極端な増減はなく安定しており、新形式問題においても変わらず 40% 強（25 問中 10 問、ないしは 11 問）の出題が想定される。次に、「Yes/No 疑問文」に関しては、「リニューアル後の後期」において数値が大きく下がったが、「今回のリニューアル」において「リニューアル後の初期」の数値に回復している。また、『Vol. 3』（2008 年発行）においては 13.3%、『Vol. 4』（2009 年発行）においては 8.3% であったことから、『Vol. 4』以降しばらく続いていた傾向が新形式問題においては元に戻り、15% 前後（25 問中 3 問、ないしは 4 問）の出題が予測される。

続いて、「選択疑問文」については、数値は安定しており、新形式問題においても6%前後（25問中1問、ないしは2問）の出題が想定される。さらに、「依頼・提案の文」については、「今回のリニューアル」において数値が上昇しているが、『Vol. 6』からすでにこの傾向が現われていることがわかる。したがって、新形式問題において、「Yes/No 疑問文」と同様の15%前後（25問中3問、ないしは4問）の出題が予測される。そして、「付加・否定疑問文」に関しては、数値は安定しており、新形式問題においても、「Yes/No 疑問文」や「依頼・提案の文」と同様の15%前後（25問中3問、ないしは4問）の出題が想定される。最後に、「肯定文と否定文」に関してであるが、「今回のリニューアル」において、「リニューアル後の後期」の数値から半減しており、「リニューアル後の初期」とくらべても5%ほどその数値が下がっている。また、『Vol. 3』や『Vol. 4』においても、それぞれ11.7%、13.3%という10%を超える数値であったことから考えると、新形式問題においてはこの質問文が減少することが考えられる。したがって、「肯定文と否定文」については、『新形式』の数値を反映した8%程度（25問中2問程度）の出題になるのではないかと予測したい。

以上のことから考えると、新形式問題においては、「肯定文と否定文」の出題数が減り、その減少分が「Yes/No 疑問文」の出題数の回復と「依頼・提案の文」の出題数の増加へと回ることが予測される。疑問文の形式をとらないこの「肯定文と否定文」という質問文に関しては、“I found a new supplier for the garden fertilizer we use.”（『新形式』TEST 2-26番）という事実を述べるものもあれば、“I’m so excited about meeting the new boss.”（『Vol. 2』 TEST 2-37番）という意見や感想を述べるものもあれば、“Please make yourself comfortable until Ms. Kim arrives.”（『Vol. 5』 TEST 2-36番）という命令をするものもあることから、その応答のパターンが疑問文の質問文に対する応答のパターンとくらべると多種多様化するため、問題の難易度はほかの5種類の質問文の問題よりもかなり上がる。したがって、「肯定文と否定文」の出題数が減ることが予測される新形式問題の Part 2 は、TOEIC® 初級者にとっても TOEIC® 上級者にとっても、その難易度は下がることになる。

さらにもう少しだけ、質問文という観点から、新形式問題の Part 2 の難易度に関して考えてみる。授業で Part 2 の問題練習をしている際に、TOEIC® 初級者をすでに脱して TOEIC® 中級者になろうとしている学生でも、「否定疑問文」と「現在完了形、または、現在進行形」と「受動態」という、すなわち、多くの日本人英語学習者にとって苦手な文法事項であるこれら3つの要素のうちの2つが組み合わされた質問文に対して、「肯定文

と否定文」の質問文と同様のむずかしさを感じるようである。そして，“Where is the art exhibition being held?” (『Vol. 1』TEST 2-18番)，“Hasn’t anyone taken your order yet?” (『Vol. 2』TEST 1-27番)，“Why has the book’s release date been delayed?” (『Vol. 5』TEST 2-29番)，“Weren’t the windows in the lobby supposed to be replaced?” (『Vol. 6』TEST 2-39番)といったこの種類の質問文は、「リニューアル後の初期」(合計5問)から「リニューアル後の後期」(合計7問)まで、出題数そのものは決して多くはないものの比較的コンスタントに出題されてきた。ところが、『新形式』においては、この種類の質問文はまったくなくなっている。この傾向と「肯定文と否定文」の出題数が減ることが予測されることを考え合わせると、「質問文の種類」という観点からみた新形式問題の Part 2 は、その難易度が下がることが予測できるのである。

4. 「質問文に対する誤答の選択肢」から検討する

筆者は、以前の論文において、TOEIC® 初級者が400点、ないしは、500点に到達するための Part 2 攻略法を、公式問題集を分析することを通して提示や検証を行なった。ここでは、その攻略法のなかから、

WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である

質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である

のふたつを取り上げ、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点から、Part 2 の新形式問題における難易度を予測してみたい。

まず、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である」についてである。

表4 WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える誤答選択肢の分布

	Vol. 1	Vol. 2	1 + 2	Vol. 5	Vol. 6	5 + 6	新形式
WH 疑問文	16.7	16.7	16.7	9.3	21.4	15.5	19.6
選択疑問文	50	25	38.9	0	0	0	0

上の表4は、これまでに分析してきた Part 2 の質問文に対する選択肢に関して、WH 疑問文の誤答の選択肢の総数に対して Yes/No で答えている選択肢の数が占めるパーセンテージを、さらに、選択疑問文についても同様のパーセンテージを算出したものである（それぞれ小数点以下第四位を四捨五入。なお、この表の「WH 疑問文」には、“How about taking the train this time?” [『Vol. 6』TEST 1-38番] や “Why don't we offer a vegetarian dish at the lunch?” [『新形式』TEST 2-39番] といった「WH 疑問文の形をとる依頼・提案の文」が含まれている）。

上の表からみると、まず、“What shift are you working on Saturday?” という質問文に対する “Yes, we booked it in April.” という選択肢（『新形式』TEST 1-14番）や、“Why is there so much traffic?” に対する “No, that's enough.”（『新形式』TEST 2-14番）のような、WH 疑問文の誤答の選択肢において Yes/No の選択肢が占める割合は『新形式』において上昇している。5 ポイントに満たない上昇に見えるが、「リニューアル後の初期（Vol. 1+Vol. 2）」と「リニューアル後の後期（Vol. 5+Vol. 6）」の両方の数値を上回っていること、さらに、「表3 質問文の種類分布」でみたように「WH 疑問文」の質問文の数が質問文総数に占める割合にはほぼ変化がないことを考えると、この上昇は新形式問題における Yes/No の選択肢の数が減少することではなく、むしろ上昇する可能性が大きいことを、すなわち、新形式問題における Part 2 の易化傾向を示しているといえる。いっぽう、選択疑問文における Yes/No の選択肢は、「リニューアル後の後期（Vol. 5+ Vol. 6）」でその姿がみられなくなり、『新形式』においてもその傾向が続いている。“Can you repair the ceiling light, or should we call the electrician?” という質問文に対する “No, the other pair.” という選択肢（『Vol. 4』TEST 2-24番）のように、「リニューアル後の中期（Vol. 3+Vol. 4）」まではみられる（数値は25%）ことも考慮すると、新形式問題においてはこの Yes/No の選択肢はおそらく出題されないことが推測される。

ここで、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である」というこの攻略法について、一点注意しておくべきことを取り上げておく。それは、『新形式』の「TEST 2-27番」において例外のパターンが発生していることである。この設問においては、“How about holding a training seminar on the new database?” という質問文に対して、“Yes, I think we should.” という選択肢があり、Yes/No で答えるこの選択肢は攻略法に当てはめれば誤答選択肢になるはずであるが、ここでは正答の選択肢になっている。ただし、この質問文は純粋な「WH 疑問文」ではなく「WH 疑問文の形をとる依頼・提案の文」であるため、攻略法は「WH 疑問文（依頼・提案の文は除く）」と選

択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である」と若干の修正を加えるだけになるが、「TEST 2-27番」のようなパターンが唯一の例外となるのか、あるいは、今後も継続してみられるものとなるのか、新形式問題における推移に注目していきたい。

次に、「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」についてである。それぞれのパターンの一例を挙げておくと、同じ語に関しては、“Are you still working on the final budget?” という質問文に対する“The decision was final.”という選択肢（『新形式』TEST 2-24番）、似た音の語に関しては、“Are you going on vacation this month or next month?”に対する“A different location.”（『新形式』TEST 2-16番）、派生語に関しては、“I'll lose my registration fee if I can't attend the workshop, right?”に対する“Check the lost and found.”（『新形式』TEST 1-21番）がある。

表5 質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む誤答選択肢の分布

Vol. 1	Vol. 2	1 + 2	Vol. 5	Vol. 6	5 + 6	新形式
53.3	41.7	47.5	22.5	23.3	22.9	27

上の表5は、これまでに分析してきた Part 2 の質問文に対する選択肢に関して、すべての誤答の選択肢の総数に対して、「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」のなかの誤答選択肢の数が占めるパーセンテージを算出したものである（小数点以下第四位を四捨五入）。「リニューアル後の初期」の高すぎたといえる数値は「リニューアル後の後期」では落ち着きをみせ、「今回のリニューアル」においては、「リニューアル後の後期」を4%ほど上回る数値となっている。例えば、質問文に対する誤答の選択肢の両方ともに「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」が含まれている問題の数が、Vol. 1 で19問、Vol. 2 で10問あったものが、Vol. 5 では3問、Vol. 6 では5問と減少し、『新形式』で6問というほぼ横ばいの数字になっていることから、新形式問題において、「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」のなかの誤答選択肢の数が占めるパーセンテージが急激に上昇することは考えにくい。したがって、新形式問題においても25%前後の数値を保つことが想定されることから、この観点からみた新形式問題における Part 2 の難化傾向は想定しづらく、むしろ、「リニューアル後の後期」を4%ほど上回っていることから、やや易化の傾向を示しているといえる。

先ほど、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である」という攻略法に関しては、『新形式』における例外が認められることからその修正をすることとなった。いっぽう、この「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」に関しては、『新形式』においても、27（当てはまる選択肢の総数から例外を除いた数）÷31＝87.1（小数点以下第四位を四捨五入）というように85%を上回っており、この攻略法が新形式問題においても変わらず効果的であることを付け加えておく。

それでは、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点からの最後に、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢は100%不正解である」と「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢は、85%が不正解である」というふたつの攻略法を合わせた「誤答の選択肢」を取り上げて、Part 2 の新形式問題における難易度を予測してみたい。

表 6 ふたつの攻略法を合わせた誤答選択肢の分布

Vol. 1	Vol. 2	1 + 2	Vol. 5	Vol. 6	5 + 6	新形式
60.8	47.5	54.2	25	30.8	27.9	35

上の表 6 は、これまでに分析してきた Part 2 の質問文に対する選択肢に関して、すべての誤答の選択肢の総数に対して、「WH 疑問文と選択疑問文に Yes/No で答える選択肢」と「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」のなかの誤答選択肢の合計数（ひとつの選択肢に両方の要素が重なっている場合には、のべ数とせず 1 と数えた）が占めるパーセンテージを算出したものである（小数点以下第四位を四捨五入）。「リニューアル後の初期」の高い数値は「リニューアル後の後期」においてはほぼ半減しているが、「今回のリニューアル」においては、「リニューアル後の後期」を 7 ポイントほど上回る数値となっている。この数値から推察すると、「質問文に対する誤答の選択肢」という観点からみた新形式問題における Part 2 の難易度は、TOEIC® 初級者にとっても TOEIC® 上級者にとっても、はっきりと易化傾向を示しているといえる。

5. お わ り に

本論文では、「リニューアル後の初期」、「リニューアル後の後期」、そして、「今回のリニュー

アル」という3つの段階に該当する公式問題集の総計290問の Part 2 の問題について、「質問文の語数」、「質問文の種類」、そして、「質問文に対する誤答の選択肢」という3種類の観点から分析を行なうことを通して、「今回のリニューアル」の Part 2 の問題が以前のものとのちがいがいいのかどうかを考察し、新形式問題における Part 2 の難易度を推察してきた。

まず、「質問文の語数」の観点からは、新形式問題においては6語から9語程度の質問文が7割を超え、長くて10語程度で収まるであろうことが推測できた。TOEIC® 上級者にとっては、10語以上の質問文の割合が減少する傾向は Part 2 の易化を示しているが、TOEIC® 初級者にとっては、6語未満の短い質問文が減少し、6語・7語の質問文ではなく8語の質問文が増加するであろう傾向は Part 2 の難化を示しているといえた。次に、「質問文の種類」の観点からは、問題の難易度がほかの質問文の問題とくらべるとかなり上がる、「肯定文と否定文」の出題数が減ることが予測されるため、新形式問題においては、Part 2 の難易度は TOEIC® 初級者にとっても TOEIC® 上級者にとっても下がるということが推測された。また、「否定疑問文」と「現在完了形、または、現在進行形」と「受動態」という、多くの日本人英語学習者にとって苦手な3つの文法事項のうちの2つが組み合わせられた質問文の出題がかなり減ることも推察され、新形式問題の Part 2 の難易度は下がることが予測された。最後に、「質問文に対する誤答の選択肢」の観点からは、「WH 疑問文」の質問文の割合は変わらないのに対して WH 疑問文の誤答の選択肢において Yes/No の選択肢が占める割合が上昇していることから、また、「質問文の名詞・動詞・形容詞・副詞と、同じ語・似た音の語・派生語を含む選択肢」のなかの誤答選択肢の数が占める割合がわずかながら上昇していることから、新形式問題における Part 2 の難易度は易化を示しているといえた。

以上、3種類の観点から分析を行なった結果から総合的に下される結論は、「新形式問題における Part 2 の難易度は下がることが予想される」である。「易化」対「難化」が、「質問文の種類」と「質問文に対する誤答の選択肢」対「質問文の語数」で2対1であるという以上に、「質問文の語数」に関してはひとつひとつの単語の長さによる誤差、すなわち、語数が多くても質問文が音的に短くなる（またはその逆の）現象が生じるのに対して、「質問文の種類」と「質問文に対する誤答の選択肢」というものは本質的なものなので、つまり、「肯定文と否定文」という質問文は常に「肯定文」か「否定文」の形をとる質問文であるので、「質問文の語数」における誤差というものは発生しない。このように、「質問文の語数」の数値が、「質問文の種類」と「質問文に対する誤答の選択肢」の

ものよりも流動的なものであることから、「新形式問題における Part 2 の難易度は下がることが予想される」という結論を下したいと思う。

ただし、本論文において行なった、新形式問題における Part 2 の難易度の予測は、『新形式』の50問のみを分析の対象にするしかなかったという点で、絶対的なものではない。したがって、今後発行される新形式問題の公式問題集に収載される Part 2 の問題を分析していくことで、今回の結論が正しいか否かを検証していくことが大切であろう。

引 証 文 献

- 〔1〕 Educational Testing Service. 『TOEIC® テスト 新公式問題集』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2005.
- 〔2〕 —. 『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 2』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2007.
- 〔3〕 —. 『TOEIC® テスト新公式問題集 Vol. 3』東京：国際コミュニケーションズ・スクール，2008.
- 〔4〕 —. 『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 4』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2009.
- 〔5〕 —. 『TOEIC® テスト 公式プラクティスリスニング編』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2011.
- 〔6〕 —. 『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 5』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2012.
- 〔7〕 —. 『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 6』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2014.
- 〔8〕 —. 『TOEIC® テスト 公式問題集 新形式問題対応編』東京：国際ビジネスコミュニケーション協会，2016.
- 〔9〕 井上 治. 『TOEIC® テスト初級者のためのリスニング・セクション パート2 攻略法——ETS 作成問題の分析を通して』『生駒経済論叢』（近畿大学経済学会）第4巻第3号（2007年3月）：47-59.
- 〔10〕 —. 『TOEIC® テスト初級者のためのリスニング・セクション パート2 攻略法再考——近畿大学経済学部の TOEIC® テストへの取り組みとともに』『生駒経済論叢』（近畿大学経済学会）第6巻第2号（2008年10月）：115-131.